マッセ・市民セミナー（泉北・泉南ブロック）

「幼少期の発達障害の理解とアプローチ」

開催日：平成24年７月11日（水）
会　場：泉佐野市立社会福祉センター　大会議室

「幼少期の発達障害の理解とアプローチ」

竹田 契一　氏（大阪医科大学LDセンター　顧問）

はじめに

最近、比較的年齢層の高い方のニーズが多かったので、そちらに集中していたのですが、今日は特に幼児期の保育、就学前の段階のさまざまな子育てというところから話を進めていきたいと思っています。

最初に大阪の話からします。５月初旬に私は日本を離れていたのですが、そのときに大阪市でとんでもないことが起こっていました。何かというと、大阪維新の会の大阪市議団が、発達障がいは予防できるということで、子育てに関係する法案を出そうとしていたのです。実際は、単にどこかから借りてきたものをたたき台にして法案を作ろうとしていたのですが、ポイントは二つあります。

「母原病」という言葉を聞いたことはありますか。すべての原因はお母さんであるという大変な時代がありました。その流れをくんでいるものに、「親学」があります。一部いいことを言っているように見えるのですが、根本的に問題があるのは、発達障がいは環境で起きると言っていることです。脳の障がいは認めているのですが、お母さんの子育てが上手にできたら発達障がいは起きないと言っているのです。これはうそです。発達障がいは全部脳障がいであり、絶対に予防はできません。どんなに上手に育てても出るものは出るのです。自民党には親学研究会がありますし、民主党も先日作りましたが、発達障がいはちゃんと指導したら予防できると誰かが言ったものですから、みんなだまされているのです。予防できたら美しい話です。しかし、全部脳の障がいですから予防はできません。

大阪市はびっくりして、１日のうちに撤回しました。間に「親の会」が入ってくれまして、６月１日に大阪維新の会の市議団全員が集まり、私が２時間、発達障がいの講演をしてきました。今、府議団に申し入れをしているので、そこでも話をしようと思っています。要するに、発達障がいとはどういうものか

という理解がものすごく悪いのです。

30～40年前は、専門の先生が「お母さん、あんた一体どんな育て方をしたん。あんたの育て方が悪いから、この子はこんなになったんやで。早く仕事を辞めなさい。もっと子どものそばにちゃんとついていなさい」と言っていた時代があるのです。ここが母原病のところです。確かにお母さんの育て方から来ている問題や虐待の問題などいろいろあるのも事実ですが、発達障がいは全部脳の障がいです。原因不明の場合が多いのです。そして、予防は絶対にできません。最初にそれを申し上げてこれからの話をします。

また、途中でも出てきますが、お父さん、お母さんの育て方が悪いから発達障がいになったということは絶対にないので、そういうことを示唆するような話を親にしてはいけません。ものすごく無責任なのです。特に皆さんの立場でその一言を言うと、親ががたがたに崩れます。「本当にそうなん。うちの子、私の育て方が悪かったからやろうか」となってきますので、要注意です。

1．発達障がいで見られる診断名の変更

6歳よりもっと早い時期から、「先生、うちの子、落ち着きがないんです。とにかく、買い物をしていてこっちを向いている間に、いなくなります」という話を聞くことがあります。いつも迷子になります。迷子にならなくても、じっとしていられなくて、立ち上がってうろうろします。保育所でもいつも何かが起こっています。誰かにかみついたとか、どこどこの親に謝りに行ってくださいとか、幼稚園の先生から1週間に1回は電話があって、親は常に謝り続けなくてはいけない、なぜこんなに落ち着きがないのかというのです。

皆さんが見ておられる幼児の中にも、注意集中、多動性、衝動性など何らかの問題があって、注意欠陥多動性障害（ADHD）などの診断名が既に付いている子どもがいませんか。もちろん、発達障がいの支援センターの方もいるかもしれませんので、たくさんいて当たり前なのですが、普通の保育所や幼稚園の話として聞いていただいて、現在診断名が付いていることを知っている方は手を挙げてください。数が少ないですね。親が言っていない場合もありますし、幼稚園だと、まだ診断名が付いていないこともあります。

では、単なる元気な子とは違って、どう見ても同じ年齢の子と比べて多動だという子を見ている方は手を挙げてください。遠慮がちに手が挙がっています

が、これも少ないですね。

では、質問を変えます。小さいときに落ち着きがないと言われた方、手を挙げてください。今日帰ったら親に聞いてみてほしいのですが、そんなに少ないものではなくて、もっとたくさんいるはずです。

では、現在のことを聞きます。捨てられない、ため込む、整理整頓が下手である、いつかは使えるだろうと思ってためているけれども使えた試しがないという方、手を挙げてください。やっと正直になってきましたね。

次に、自分はおしゃべりだ、おしゃべりを我慢できないという方は手を挙げてください。隣に知り合いの人がいたら、「あんた、そうやで」と指摘してあげてください。

20代、30代、40代と年齢が上がると忘れ物が多くなるのですが、そういうこととは関係なく、どうも私は忘れ物をしやすい、いろいろ言われてもポカが多い、忘れやすいという方は手を挙げてください。先ほどから言っていることにほとんど手が挙がっている方は、相当危ないです。というよりも、障がいがないのです。多動というのは、元気な人とイコールで結び付くところがあります。例えば、ADHDに近い状態なぐらい多動な人というのは、セールスマンにものすごくいいのです。政治家もそうです。管理職、園長さんなど一番上の方は、多動の方がうまくいきます。小学校の場合、校長、教頭がそれに当たるわけです。

例えば、国から体育の研究授業が市に下りてきた、理科の研究をやれと下りてきたとします。こんなものを引き受けたらまた先生たちがブーブーと言うからと校長はみんな断るのですが、絶対に断れないタイプの校長がいます。誰かというと、ADHDタイプです。多動系の校長は頼まれたら絶対に引き受けるのです。ですから、先生はブーブー言っているのですが、学校はいつも元気に動いています。ただ、校長も多動で教頭も多動というのはまずいです。一人が多動の場合、「校長先生、今年はそれは無理やと思います。こういう事情だから来年に回したらどうですか」と冷静に言える人が一人必要です。夫婦とも多動だったら家の中はぐしゃぐしゃです。大体みんなバランスで結婚していますので、その辺を考えないといけません。自分と全く同じタイプの人と結婚したらろくなことがないというケースがよくあるかと思います。

子どもは大体親に似ますので、お父さんかお母さんが多動だったり、すごく天然の要素がある方は、子どもはちょっとその気があるし、もっと強く出るかもしれません。DNAでつながっていますので、発達障がいの子どもというのは、

よく見ると、親が小さいときに似たような状態だったということがよくあります。これは深刻な問題ではなく、性格が似てくるのです。そういうことを最初にお話しして、これからの話を聞いていただきたいと思います。

小さいときに不注意と多動で大変だった子が、小学校に入ったら読み書きに問題があって、診断名が学習障害（LD）へと変わる。だんだん高学年になると、集団の中でひとりぼっちである、一言多い、人を傷つけたということで、診断名がアスペルガーに変わるということがよくあります。本当はもともとアスペルガーなのです。アスペルガーも最初は多動から始まっているのです。ただ、どうもあの子は頭がいいという場合もあります。

ですから、一人の子どもさんで診断名が変わるというのは、もともとアスペルガーなのだけれども、最初は目立たなくて、「あの子、落ち着きがなくて、動きが激しくてすごいね。だけど、元気やね」というのが幼児期から始まります。ところが、学校に入ると読み書きに問題があって、「大変や、この子、LDがある」。高学年になって、「それもあるけれども、対人関係が悪い。あの子、KYやで」というとアスペルガーの方にいきます。ということは、ADHDとLDとアスペルガーは底を流れているものは同じなのです。出方が違うだけです。

２．感覚の障がい

ここからが幼児期の発達障がいの本題です。専門用語が二つ、三つ入ってきます。一つは、前庭覚という問題です。０歳から２歳までは何でも起きますので除外するとして、３、４、５歳で次のことが頻繁に見られる子は、前庭覚に何か問題があるタイプの子です。

いつもくるくる回る。滑り台から降りたら、一度回ってからまた上がるというのもそうです。０歳から２歳までは何でもやらかすので何の問題もありません。問題は３、４、５歳です。少しずつ減ってきて、５歳で何もなければ大丈夫です。起こるとしたら、学校に入っても続きます。不安の状態になるとくるくる回るということが多いときは要注意です。赤信号ではありませんが、黄色の信号の一つとして数えます。それから、いつもつま先で歩いて、喜ぶときに上下動が大きいことです。つま先歩きで上下動が多いというのは前庭系の問題なのです。時々出るのは当たり前ですし、一つ出る子は大丈夫です。三つぐらい重なったときは背景に自閉症を考えます。

次は触覚です。これも３、４、５歳での問題点ですが、シャツの後ろのタグがちくちくするからと切ってほしがります。最近のタグは脇腹についているものが多いので、そこをよく触って、穴が開く子がいます。そういう子は要注意です。触覚系が相当敏感な子です。それから、顔に水が付くのを嫌がる。頭を洗うのが一苦労である。髪の毛を切るとパニックになる。同じ服しか着ない。同じ寝間着ばかり着る。色で選ぶというよりも、肌触りで好みがある。着るものに対してものすごくこだわりが強くて、親はいつも大変な思いをしている。これらは、触覚に絞って話をしています。

階段を下りるとき、よく足を踏み外す。廊下を曲がるとき、人とぶつかってすぐにけんかになる。はさみを使うときに上手に使えないで、年長さんになっても引きちぎるようにする。いくら教えても、紙の角を合わせて折り紙ができない。これは、年少・年中は大丈夫です。年長の話です。

そういう問題がだんだん進んでくると、トイレの水の音が嫌で、トイレを流すのを怖がる。掃除機の音を嫌がる。特に嫌いな音が一つ二つある。必ずしもガヤガヤザワザワではなく、その子特有の怖い音があって、その怖がり方が異常である。すぐ耳をふさぐ。楽器をならして、今から音楽会ですとなると、すごく嫌がる。ADHDは、嫌がっても本番だけ強いという子もいますので何とも言えないのですが、自閉系の子は駄目となったらずっと駄目です。

部屋から飛び出すというときに、発達障がいは二種類あります。ADHDタイプの不注意・多動性の強い幼児が部屋を飛び出すときは、360度注意集中が行き届いていて、「あ、ヘリコプターが来たで」「あの辺に救急車が来た。あ、今、曲がった」というのは全部分かっています。でも、肝心の先生の話は何一つ聞いていません。こちらが聞いてほしい話は聞いていないけれども、どうでもいい話は全部聞いている、360度アンテナが張り巡らされているのがADHDです。

このような注意集中そのものに問題があるのですが、もう一つ、その流れの中で問題になるのが嗅覚、味覚です。「竹田先生、うちの子はものすごい便利なんですわ」と言ったお母さんがいます。便利という言葉は、発達障がいの子を持っている親からあまり聞いたことがないので、「何が便利ですか」と聞くと、「うちの子がにおって、『あかん』と言ったら、大体腐ってますねん」「賞味期限を見るよりも、この子がいいか悪いか判断してくれますねん」。これぐらいすべてを明るく受け止める家は悪いように取っていませんからありがたいのです。

ただ、触覚に絡むところでもう一つ、痛覚の問題があります。触覚、聴覚などは敏感なのに、痛みだけは鈍感なのです。頭をゴンゴンしても泣かない、髪の毛を抜いても泣かない、けがをしても泣かない、けれども血を見て初めて泣く。痛みに対して鈍感というのも、実は発達障がいの中に出てきます。

次に、固有感覚というのは、骨、筋肉、関節を通して内的に私たちが感じ取る感覚のことです。今、皆さん、靴を履いていますね。私が「靴を履いていますね」と言って初めて靴を履いている感覚が戻ったと思います。それまでは無意識です。無意識のうちに持っているさまざまな感覚の中に、固有感覚というのがあります。ここがやられると筋肉の緊張性が低く、ダウン症のようにぐにゃぐにゃになります。小さいときから首の座りがすごく遅かったし、はいはいから立ち上がって歩くまでも遅かった。いすに座っても、じっとしていない。あっちを向いたり、こっちを向いたり、とにかくぐにゃぐにゃしている。１年生になっても、「しゃんと背筋を伸ばして」と言ったら２～３秒はできるけれども、そのうち机に伏せて寝てしまう。こういうのを低緊張といいます。

低緊張の子どもは、走らせても手足がばらばらで真っすぐに走れませんし、すぐにひっくり返ります。また、私たちは、倒れるときには無意識のうちに手を出して頭が当たらないようにするという反射機能を幼児期から持っています。ところが、倒れるときに、手が出るよりも顔が地面にめり込む方が早くて傷だらけという子は、非常に危ないです。低緊張と同時に、反射機能が遅れるタイプです。そういうタイプの子は、大体中学生までに２～３回は骨折しています。捻挫は当たり前で、生傷が絶えない。すぐドアに手を挟む。「何やねん、この子」というようなことが同じクラスの中で何回も起こっています。

今の話を聞いて子どもの顔が浮かんだ方は、手を挙げてください。自閉かどうかは分かりません。単なる発達の遅れかもしれません。しかし、そういう子どもさんがたくさんいます。そして、今挙げたものが発達障がいの方向に行くとするならば、文部科学省の調査では、小学校に入った時点で40人学級に２～３人いるといわれています。ところが、現実にはもっと多いことが分かっています。

視知覚の方で、自閉の状態像が相当きつく出ているタイプ、例えばアスペルガー症候群ですが、蛍光灯をじっと見ている子がいたとしたら、間違いなく１秒間に何回点滅しているか数えることができます。私たちは数えられません。自閉の一部には、点滅しているのが見える子がいます。そういう子は、蛍光灯

が大嫌いです。そこにいるだけで不安な気持ちになります。私たちとは感覚が違うと思ってください。あなたにとっては大丈夫でも、この子にとっては大丈夫ではないことがあります。

雨の日に外に出て、「雨が痛い」と言った子がいます。語彙の使い方が間違っているのはなく、この子は本当に痛いのです。自閉の中には、雨が当たったら、それを痛みとして感じるぐらい敏感な子もいます。あなたの常識はこの子どもにとっての常識とは違います。ですから、その子どもの訴えをまともにとってあげないといけません。「また大げさに言っているわ、この子」と思うのは大間違いです。

今話をしたのは、全部、幼児期に出る感覚の問題です。これが一つ二つ出てもどうということはありません。出るときは幾つか重なります。例えばもう一つ、すぐ靴下を脱ぐというのもあるのですが、保育所や幼稚園によってははじめから靴下を脱がしていますので、あまり当てにならない話です。すぐ靴下を脱ぐという行動を問題として入れるのは、触覚系の問題がある場合です。シャツの後ろのタグがちくちくするから切ってくれというのと同じ流れの中で使います。

食べるときに、この舌触りは駄目だとか、このスプーンが駄目だとか、この入れ物でなくてはいけないとか、その子特有のものがあることを単なる偏食と間違えてとらえることがありますから要注意です。それから、私は嫌われていると思った先生がいるのですが、その先生が嫌われているのではなく、その先生が付けていた香水が嫌いだったと後で分かったことがあります。

A君はきりん組に所属しているのですが、きりん組に入るときに、先生の趣味で、いつもある音楽がラジカセから鳴るのです。A君はその音楽が鳴るとパニックを起こして部屋に入りたがらないのですが、まさかそんなことが理由で入りたがらないとは誰も知りませんでした。それが分かったのは10年後です。その子が中学生になってしゃべれるようになったときに言ったのです。「あのな、僕な、あの幼稚園の先生、嫌いやねん」「今ごろ言っても遅いで。何やったん」「あの先生、趣味が悪いねん」「どんな趣味やねん」。ちょっと忘れましたが、何とかという音楽をラジカセでかけたらわーっとなってきて部屋に入れない。その先生がいないときや音楽がかかっていないときはちゃんと部屋に入れる。誰もそんなことは思わないので、部屋に入るときにギャーッとやったら、「大丈夫よ」と言って放り込みます。嫌いな部屋に放り込まれているのですから、

本人にしてみたらすごいことです。それぐらい皆さんの理解とこの子の持っている気持ちにずれがあるのが発達障がいです。

知的障がいとは違うので、後に言われるのです。私は20年後に「あのときは」と言われたことがあるのですが、がくっときます。私が大阪教育大学にいたときに、お母さんが、「先生、うちの子はすぐこういうことをするんですよ。みっともないから、何とか取ってもらえませんか」と言うので必死になって考えました。でも、やればやるほどひどくなりました。ところが、不安なとき、何か一つのことに没頭しているときにその動作が出ることが後で分かったのです。その子から、「あれだけは取らないでください」と後で言われたのです。

アスペルガーや高機能の子はしっかり覚えているので、後で言われるのです。20年ぐらいたってから言われたら、びっくりします。１週間ほど立ち上がれないぐらいショックを受けます。「何が専門家やねん」ということが山ほどあります。ですから、知的障がいで言えない子や、脳性麻痺が重度で言えないような子どもの指導をしていて、自分では正しいことをしているつもりでも、その子にとってはものすごくつらいこと、嫌なことである場合もあります。フィードバックがないので分からないのです。

医学では、間違った治療をしたら、患者さんは死ぬかもしれません。そうしたら、二度とあの薬は出さないようにしようとか、あのときにあの手術をしてはいけないということが入るので、修正が利きます。しかし、教育や保育の世界は修正が利かないのです。こちらの方で気付かなければなりません。皆さんの感覚のみなのです。皆さんが感覚的にしっかりと見ていないと、30年、間違ったままかもしれません。ベテランほど危ない職業はないのです。ベテランというのは、ただしわの数が多い人のことをいいます。能力的に高い人のことはエキスパートといいます。ですから、「あの人、ベテランやから」というのは、皮肉だと思ってください。

３．相互作用の重要性

こちらが投げたボールを子どもが受け止めて、こちらに投げ返してくる。これを、相互作用があったといいます。ですから、一方通行ではなく、こちら側がその子に理解できるような言葉を投げかけたときに、本人が分かって答えてくれたというのは、１回相互作用があったわけです。別の言葉で言うと、やり

とりがあるといいます。

今から40年ほど前に、デズモンド・モリスという動物学者がある研究をしています。６か月ぐらいの赤ちゃんとそのお母さんに声を掛ける人をビデオで撮影していると、まだしわくちゃでサルみたいだけれども、お母さんの手前、こう言わなくてはいけないなと思って「かわいい赤ちゃんですね」と言ったのか、本当にかわいいと思って言ったのか、すぐにばれるという話なのです。実は、本当にかわいいと思って言ったときは、一瞬、瞳孔が開くのです。

「あんた、ボーイフレンドができたんじゃない」「誰か相手ができたでしょう」と言うと、その人の目が輝くとか、表情が違うということがあります。その人の雰囲気的なところでの違いもあるのですが、目というのはすごいのです。「まあ、かわいい赤ちゃんですね」という一言を通り掛かりの人に言わせたときに、本心で言っているか、うそで言っているかが、一瞬のうちに分かるという研究です。実は、これは本当に怖い話なのです。

20年ぐらい前、支援学校になる前の、兵庫県にある肢体不自由児の養護学校での話です。脳性麻痺のA君の大事な先生は、B先生です。食事を食べさせるとき、B先生はA君の口がどれぐらい開くか、舌の上にどれぐらいの量を乗せてあげたらいいかということがちゃんと分かっていますから、A君は安心して口を開けられます。ところが、そのことを知らない先生の場合は、量が多すぎたりして、一つ間違えるとむせてしまいます。ですから、B先生とA君は完全にチームが出来上がっていて信頼関係があるわけです。「僕、B先生が大好きやねん。あの先生は、めちゃくちゃ上手に食べさせてくれるねん」というだけではなく、その先生のパーソナリティーが大好きなのです。

A君の食事の時間が来ました。ところが今日は、B先生はC君に食べさせています。C君の先生がお休みで、C君はすごく食べるのが難しい子どもなので、専門のB先生が食べさせるしかなかったからです。A君の方は、補助の先生が入りました。ところが、本人は嫌なのです。僕の好きなB先生がC君の方に行ってしまったから、ジェラシーを感じてちらちらそちらを見ています。食べるどころではありません。半分は食べましたが、これ以上は食べたくない。どうしたかというと、普段は車椅子のA君が、にじるように今の場所を離れて、B先生に突進していくのです。「B先生は僕の先生やねん」。B先生は、「A君、もう食べたんか。どないしたん」と声を掛けます。

支援学校の先生は、学校にいる間、休む時間はありません。何かをしながら

これもするということが常に求められているので、自分のスープを飲みながら、子どもにもスープを飲ませます。ですから、先生のトレーと子どものトレーの両方を置いて食事をしています。そこにA君がにじり寄ってきて、「B先生、僕、大好きよ」とニコッとしたときに、彼のよだれがB先生のスープに入ったのです。そのとき、B先生は顔色を変えました。それをA君は見逃しませんでした。それから二度とB先生はそのスープを飲みませんでした。A君はB先生の方に寄らなくなりました。重度障害の子どもは、一瞬のうちに相手の気持ちを見抜きます。

知的に保たれている、脳の皮質がしっかりしている子どもはだませます。「A君、今日はいいお洋服を着ているね。お母さんに作ってもらったん。すごくいいお洋服よ」。思ってなくても、先生は子どもをだますことができます。子どもは、先生から褒められたと思います。しかし、障がいの程度が重い子ほど、本能行動をつかさどる大脳辺縁系で動いています。本能行動で動いている子どもは、われわれが見逃しているような表情、声の感じ、全身でコミュニケーションを取っています。ですから、A君はB先生の一瞬の顔の変化、表情の変化を見逃さなかったのです。

障がい児教育というのは、これぐらい厳しい、両足を突っ込んで本気でやらないといけない世界です。片足だけ突っ込んでやる領域ではありません。知的障がいのない、普通の脳の皮質の子どもはいくらでもだませます。皆さんの言うとおり、「そうか」と思ってくれます。しかし、すべてのコミュニケーションが真剣勝負で動いている障がいの重い子どもさんと関わるときは、どうか皆さん気を付けてください。

4．発達障がいについて

発達障がいの領域には、大きく三つのものが入っています。一つ目はLD（学習障害）、二つ目はADHDといわれる不注意と多動性と衝動性の問題、三つ目が自閉症で、高機能とかアスペルガーといわれている能力の高い子どもたち、昔は軽度発達障がいと呼ばれたものです。厚生労働省が発達障害者支援法を作ったときに、発達障がいをこういう形で規定しました。

これからお話しするのは、その中のADHDと自閉症についてです。LDは、６歳以降でないと診断をつけてはいけないことになっています。６歳未満には

LDという言葉を使いません。理由は、LDを診断するには読み書き計算を調べるのですが、通っている幼稚園や保育所によって勉強している中身が全部違っているのでフェアではないからです。ですから、小学校に入って以降、LDかどうかの判定をします。ADHDは３歳から見ますので、この中に入れます。

4-1．ADHDの３症状

これからするのは、ADHDという不注意と多動性の子どもの話です。多動と衝動性というのは一つの部分で動いていて、もう一つ、不注意というのがあります。ただ、今日いらっしゃっている皆さん方が見ている子どもたちは就学前ですから、不注意はあって当たり前の世界です。それから、ほとんどの子は元気なので、多動と元気の違いがなかなか分からないと思います。３歳児がどれぐらい動くのか、４歳児がどうなのかということをちゃんと知らないで保育所や幼稚園に勤めたら、全部障がい児になってきます。

今から、ビデオを見てもらいます。A君は、座っていても４～５秒しかもたなくて、すぐに立ち上がり、ぐるっと走ってまた戻ってきます。年長さんと１年生のときは、立ち上がってもまた座ることを先生がだんだん分かってきたので、注意されずに済んでいました。少なくとも、動き回っていてもちゃんと聞いていて理解できていたのです。

しかし、２年生のときの先生は完全主義でした。「右向け」と言って一人でも右を向いていない子がいたら、「あんた、どこ見てるねん」と言うタイプの先生でした。A君にしてみたらとんでもない先生です。「A君、どこを見てるの」「A君、座りなさい」「A君、誰と話をしているの」。45分授業で最低十何回は先生から声を掛けられます。先生の言うとおりにしないとものすごく怖いからということで、子どもは子どもなりにいすに座るようにはなったのですが、自宅に帰ってからその反動でパニックを起こします。そのときのビデオがありますので、見てください。

○ビデオ上映

多分、隣の家の人は、「隣のお母さんが、子どもを虐待しています」と警察に電話すると思います。でも、この家の前は大通りでトラックも通っています。子どもさんは、興奮状態になると信号無視をして走るのです。大きな事故が起

きても不思議ではありません。ですから、パニックを起こしている20分間、母さんは泣きながら押さえているのです。

たまたまそのときにテレビ局が入って撮らせてもらったのですが、学校はこんな状態になってしまったことを知りませんでした。年長さんとか１年生のときは、ちょろちょろ、うろうろはしていても、おとなしかったのです。ところが、２年生になると、「A君、これをしたらあかん」「A君、何をやってるねん」「A君、またしゃべってる」「A君、立ち上がった」。どんどんパニックを起こすようになりました。いらいらしたまま帰ってきて、目の前にいるお姉ちゃんを蹴飛ばしたので、「お姉ちゃんが悪いのと違う。たたきたいんやったら、お母さんをたたき」とお母さんは言っているわけです。本人は、「動きたい、動きたい」と言っています。学校で動けなかったから、その分、家で動きたいのです。これも一つ、ADHDタイプの子の状態像だということを知っておいてほしいと思います。

4-2. こんな子はいませんか

一つのことに集中することが難しい。注意を払えない。行動する前に考えられない。じっとしていられない。順序よくものごとを進められない。学校で学習することが難しい。これは幼稚園や保育所の子どもの話ではなくて、小学校の子どもの話です。こういうところが出発点です。

4-3. ADHD児の長所

いいところもあるのです。エネルギーがいっぱい。好奇心がいっぱい。運動神経がいい。独創的。個性的で、ユーモアのセンスもある。人の気持ちが分かる。頭がいい。思いやり、親しみがある。友達がたくさんいる。先生はカッカしているけれども、クラスの人気者が多いのです。ADHDには、人を笑わせるのを生きがいにしているような子がたくさんいます。

その代わり、１年生からすごいです。基本的に頭が良くて反応が早いので、すぐ手が出ます。「お兄ちゃんのショートケーキやから、お兄ちゃんが帰ってくるまでなおしておこな」と言ったときには、もう手が出て食べています。

B君は、ちょっとぼーっとした子で、太り気味です。A君は、抑制力がないので、頭の中でちらっと思ったことをすぐに口にします。「おい、ブタ」。B君は泣い

ています。A君は先生からしかられました。「もうしません」「本当やな。もう一回ちゃんと謝りなさい」「ごめんなさい。もう二度と言いません」「よし。B君、許してあげてな」。

ところが、次の日、会うなり「おい、ブタ」です。「昨日、何て言った。謝ったのと違うの。何回も同じことを言わせないでください」と先生も言うし、親も言う。「何回も言わせんといて」はいつも言われている言葉です。

もしも先生たちが子どもに対してそれを言っているとしたら、要注意です。もしかすると、その子はADHDタイプの子かもしれません。ADHDタイプの子は、常に反省していますが、自閉の子と違うところが一つあります。自閉タイプの子は、なぜしかられているのか分からないけれども、ADHDタイプの子は、しまったと思っていることです。ただ、彼らのいいところは、次の瞬間に全部忘れていることです。ただし、自分にとって都合のいいところは覚えているし、都合の悪いことは忘れるように頭が出来上がっているところがあります。

発達障がい全体に言えることですが、自分に甘く、他人に厳しく生きるということをしています。お母さんのちょっとしたミスや先生のちょっとした失敗などはすぐに指摘するぐらいよく見ているくせに、自分が同じことをしたら、それはそれ、これはこれで、全部許されてしまいます。ですから、「おまえ、自分勝手やで」とよく言われます。

4-4. 多動性の子ども

ADHDタイプの子がクラスから飛び出すのは、360度アンテナが張り巡らされているために、「あ、ヘリコプターが来た」「あ、今、外に何か来てるで」と思ったら見たくて仕方がない。要するに、刺激が入ると、その刺激を確認しないでじっとしているわけにはいかないので飛び出すのです。ですから、ほかに新しい刺激ができたときに飛び出します。

自閉症の子ども、アスペルガー障がいや高機能自閉症の子どもが部屋を飛び出すのは、今いる場所が生理的に嫌だからです。先生が嫌だとか、自分とけんかしたお友達の顔を二度と見たくないから飛び出します。けれども、ADHDは違うのです。好奇心を何人分も持っています。見たくて仕方がないと立ち上がって、そちらに行ってしまうのです。

黒柳徹子さんが、自分はADHDだとおっしゃっていましたが、あの方は

ADHDとかLDとかが全部あったようです。『窓ぎわのトットちゃん』という本が昔すごく売れましたが、あの本を読んでいても、どこから見てもADHDだという症状が出ていますし、大人になっても全然治っていません。いろいろ話を聞いているとそのままですね。けれども、そのままでもちゃんと生きていけるということなのです。あの方の場合は、頭の良さでカバーしているところがあります。

多動性の強い子は、わざと動いているのではありません。動く必要があるからです。「あんたは動いてばかりいるから罰です。じっとここにいなさい」と言ったら余計に動きます。

4-5. 衝動性の子ども

衝動性のタイプにとっては、リハーサルさせて、あらかじめ考える機会を与えることが非常に大切です。小学校に入ると、発達障がいには絶対に向かないテストや指導プログラムがあるのですが、それが百マス計算です。どの小学校でも百マス計算をやるのですが、発達障がいの子だけには絶対にやってはいけないやり方なのです。要するに、時間制限をして何分以内にここまで行きなさいということをしてはいけないタイプ、競争させては駄目なタイプがいるのです。「どんなに時間がかかってもいいから、正確にやりなさい」から出発しなければいけないのに、「今から何分でやります」とやると、それだけで駄目になります。こういうことが学校の先生は分かっていないので、今も百マス計算をすべての子どもにやらせます。

そういうときはどうするかというと、100マスでやる子と50マスでやる子と25マスでやる子と３グループぐらいに分けておいて、終わりの時間だけそろえておけばいいのです。今日の調子でどれを選んでもいいよと言うと、大体自分のできるものを選びます。50マスならいけると思ったらそれでやりますし、25マスでもいいのです。

私たちは360度見えていますが、こういう子どもたちの特徴の一つは、真っ暗闇の中の懐中電灯だと思ってください。懐中電灯の光の届く距離が個人差です。同じ発達障がいでも、４～５メートル先まで懐中電灯の光がいく子と、１メートルぐらいのところまでしかいかないタイプの子と、中には点滅していてもうすぐ消えるという子もいます。

発達障がいだと、光の届く距離に個人差があり、遠くまで届いていないので

す。見えていないところは歩けません。要するに、ハプニングや新しいことに弱いのです。何でも最初にやらせたのでは駄目なのです。何回も何回もやって、こうやったらやれるなと分かったら歩いてきます。

定型発達の子は、360度見えています。「A君、郵便局はこの道を真っすぐ行ったところにあります。よく見てごらん。途中に信号が見えているやろ。あの信号が青になったら渡ります。渡って、真っすぐ見てごらん、左側に郵便ポストがあります。あそこが郵便局です」。ここから歩いても２～３分で行けます。しかし、真っ暗闇の中で懐中電灯しか持っていないタイプの発達障がいの子は、先が見えないので、ここを真っすぐ行ったら郵便局がありますと言われても、不安で不安で一歩も足が踏み出せません。こういうことが保育所時代から起こります。こういう子どもたちに、最初にあなたがまずやりなさいということは絶対にしてはいけません。パニックを起こします。

ですから、必ず前もって練習しておかなければいけません。運動会でも何でも、それが最初にならないように前の日までに徹底した練習をして、すべてのことをやってから本番をやります。そのときには、そういう子どもを２～３人組ませて、「先生が笛を吹いたら、ここから前の方に走ります」というように、走る場所まで全部言っておきます。そうしないと、ほかの方に向かって走る子もいます。音楽会、生活発表会、すべてにおいて、当日やることを前の日に徹底的にリハーサルすることが必要なのです。

先生の指示を聞かないうちにすぐにやってしまうタイプの子も要注意です。それから、１年生には、次のような子が多いのです。質問すると、「はーい、はーい」と言います。当然当ててもらえます。また先生が質問すると、さっき当たったのに「はーい、はーい」と言います。あと25人いるので先生は順番に当てます。これが気に入らないのです。自分しかいないと思っていますから、なぜ僕を当てないのかと思って、その次は「はいはい、はいはい、はいはい」と前に出てきます。そうすると「座りなさい」とやられます。

何回も何回も手を挙げているうちに、先生も仕方なく当てると、「おれ、何で手を挙げてたんやろう。忘れたわ」。そうすると、先生は皮肉にも「知っているときだけ手を挙げなさい」と言うのです。知っていたのです。ただ、15秒たったら消えるのです。ですから、この子に恥をかかさないためには、15秒以内に当てなくてはいけない、後で当てたのでは駄目だということです。さまざまな対応のルールがあるのですが、それが分からないととんでもないことにな

ります。

走るときは「位置について、用意、ドン」なのですが、発達障がいの子どもは、「位置について」と言ったら、その次はすぐスタートです。ですから、必ずフライングが起こるというのが、発達障がいの子の特徴です。こういうことを全部把握して、徹底して練習しておかなければいけません。

4-6. 不注意な子ども

「私はちゃんとクラスで注意しました。みんなに分かるように何回も言いました」という先生がいますが、発達障がいには、それが注意になっていないことがよくあるのです。

A君は小学校１年生です。幼稚園や保育所がどうなっているのかは分かりませんが、小学校になると広くて走るところがいっぱいあるので、「廊下は走ってはいけません」と書いてあります。「〇〇してはいけない」という書き方をするのが小学校です。「A君、廊下を走ってはいけません」「しもた、見つかったわ」。A君は、ばつの悪そうな顔をしてゆっくり歩きます。10人中９人までは、廊下を走ってはいけませんという意味が分かっています。

ところが、ADHDと自閉症の子どもは分かりません。特にアスペルガーや高機能自閉症という頭のいいタイプの子には通じにくいことが多いです。なぜならば、「廊下は走ってはいけません」という言葉の中に、どうしたらいいかが書いてないからです。「廊下は走ってはいけません」「じゃあ、どうするの」。ですから、標語は「廊下はゆっくり歩こうね」と肯定的に書かなければいけないのです。それを否定的に書くから、結局、どうすればいいか分からない。学校はそんなことばかりなのです。

保育所や幼稚園はどうなっているのかは、私は分かりません。年長さんぐらいでないと字が読めないので普通は書かないと思うのですが、書く、書かないは別として、先生方は、「ここはゆっくり歩きます」というように言葉で子どもに注意を与えます。しかし、発達障がいの場合は、次のような教え方をします。

「A君、今から先生が『ゆっくり』をやるからよく見ていてね」と言って、先生が子どもの歩幅に合わせて「ゆっくり」をやります。何回か繰り返した後に、子どもにやらせます。子どもが小走りに走ったら、「じゃあ、A君、先生と手をつないでいこな」と言って、子どもの手を引きながら「ゆっくり」をやります。戻るときも同じようにして、最後に一人でゆっくり歩かせます。

やって見せて、させてみて、確認する。モデルを示して、そのとおり本人にやらせてみて確認する。これがソーシャルスキルトレーニングの基本形です。発達障がいの幼児、児童、生徒に社会性を教えるときのトレーニングは、モデルを示して、そのとおりにさせて、修正を加えてまたさせて、それでよかったよと確認するのです。

大事なのは、その後です。「A君、『廊下は走ってはいけません』と書いてあったときは、今のようにゆっくり歩くという意味やねん。分かったか。ゆっくり歩くは、もう先生とやってみたからできるよな」。ここまで丁寧にきめ細かくやらないと入らないのが発達障がいなのです。

年長さんに言葉で説明したら、「はい」と言います。こういうときは「はい」と言いますと教えているから、言うのです。内容は分かっていません。「ごめんなさい」も言います。そういうときは「ごめんなさい」と言いなさいと教えてあるからです。教えてあることと、意味理解ができていることとは全然違います。形式が分かっているだけです。ですから、次に日になって「あんた、ちゃんと謝ったやんか。またやっているのは何や」というのはいびりです。保育所、幼稚園レベルの子どもにいびり教育をしては駄目です。

発達障がいでない子は、そこまで言うと「しまった」と反省して、先生の言うとおりにしてくれます。発達障がいがない子にはこれで効いているのです。けれども、発達障がいがある子には駄目なのです。発達障がいの子が６～10％いるということを考えると、これは要注意です。関わり方を間違えると、小学校では不登校になることが多いです。ましてや、保育所、幼稚園レベルで不登園にしてどうするのですか。上へ行けば行くほど厳しくなるのですから、せめて幼児期だけは、その子にとって「あのときはよかったな」と思えるような対応をしてほしいと思います。中学になったら教科担任制ですから大変です。指導などできません。

4-7. カリスマティック・アダルト

就学前にはまだちょっと早いのですが、覚えておいてほしいことが一つあります。義務教育の９年間の中で、子どもたちにとって一人、カリスマティック・アダルトという存在の人をつくってくださいとお願いしています。「僕が悔しい気持ちで机をひっくり返したことを分かってくれているのは、あの先生だけや。おれがなぜそうしたか、あの先生はちゃんと分かってくれている」。こう

いう先生のことをカリスマティック・アダルトといいます。

昔は単に尊敬する人として先生を見ていましたが、そうではなく、僕の気持ちを理解してくれている人。僕はこういうときはいつも暴れるというときに、その先生のところに行ったらしっかり励ましてくれて、どうしたらいいか教えてくれる人。自分を理解してくれる人。そういうカリスマティック・アダルトを９年間の義務教育の中で一人つくると、その後出てくる非行・犯罪が防止できるのです。

戦後、京都府宇治市に、宇治少年院というのがありました。４年前に閉鎖になりましたが、閉鎖になるまで、宇治少年院と私は共同研究をしてきました。130人のうち半数ぐらいは、ちょっと発達に何か問題を抱えている。そういうにおいのする生徒たちがたくさん入っている場所でもありました。

その少年院が、５年、10年の指導の中で日本一再犯率の低い少年院になりました。なぜそうなったかというと、法務教官がカリスマティック・アダルトの役割をしたからです。少年院を出た子たちが再び悪い友達に誘われる率は100％近いといわれていますが、そのときに、「ここで僕がこれをしたら、絶対先生は悲しむやろな。僕のことをあれだけ信用してくれたのに、僕はあの先生を裏切れない」という気持ちの方が勝って友達を振りきって戻ってきたのです。私もいっぱい手紙をもらいました。カリスマティック・アダルトなのです。

少年院の子どもたちではなく、一般の家庭の中でこういう立場の先生をつくりたいのです。本当は保護者がそれに当たればいいのですが、発達障がいがあると保護者との関係が難しいです。特に、中学、高校になるとそうはいきませんので、やはり先生の役目です。これは小学校１年生から中学校３年生まで入れた９年間の流れの話なのですが、こういうことがその子どもの人生の後半部分に出てくるということを知っておいてほしいと思います。

５．人間の情緒について

5-1．ミラーニューロン

自閉症児はやりとりがしにくい。字面どおりの意味しか分からない。意図の理解が難しい。会話の前提になることが分からない。そういうところから、脳について知っておいてほしい話を一つします。

ミラーニューロンというものがあります。ミラーというのは鏡という意味

で、ミラーニューロンとは、鏡のように映すニューロンということです。ミラーニューロンはいろいろな働きをしますが、最初に分かったのは次のようなことからです。

生後数か月というと、赤ちゃんがお母さんの顔をじっと見る時期です。お母さんが舌を出すと、赤ちゃんは舌は出さないけれども何となく口元をむずむずします。生後半年から１年になると、お母さんが舌を出すとその子も舌を出します。神経系の働きがそこまでできていないのに、なぜそんな模倣ができるのか不思議だったのですが、脳の中にミラーニューロンという細胞群があることが分かりました。その動作を見るだけでその細胞が反応するのです。相手が舌を出したら、それに反応する。要するに、模倣したくなる。他人の動作をまねる。そういう反応をする細胞群が存在します。電車に乗っているときに、向かい合って座っている人があくびをすると、こちらの人もあくびをするということがよくあります。これもミラーニューロンという細胞のせいだということが分かってきました。自閉症はこのミラーニューロンの働きが悪いということもだんだんと分かってきました。

これはサルを使った実験ですが、人が舌を出すと、それを見ていたサルも舌を出します。人間と同じなのです。サルができるのなら人間もできると思うのですが、サルの場合は頭の中で何が起こったかがリアルタイムに調べられるので、初めてこういうところで働きが行われていることが確認できたのです。

本題はここからです。「バイバイ」とすると相手も「バイバイ」としますが、これは本当はおかしいのです。「バイバイ」としたときに見えているのは手のひらですから、それを見て模倣するなら、手のひらが自分側になるはずです。しかし、「バイバイ」とすると、どの子も「バイバイ」とします。しないのは自閉の子だけです。自閉の子は逆バイバイになります。逆バイバイがなぜ起こるのか、50年間分からなかったのですが、やっと理由が分かりました。

１歳、２歳の年齢でも、「バイバイ」とやったときに見えているのは手のひらだけれども、一瞬のうちに相手の立場に立って判断できる能力を持っている。これがミラー細胞の本当の姿だということが分かったのです。ミラー細胞が壊れていると、相手が「バイバイ」としたときに見えているのは手のひらなので、そのまま、逆バイバイをしてしまいます。ですから、自閉症の幼児は、逆バイバイをする子が多いです。

5-2. 共感細胞

目の前の他人の行動をさも自分が体験しているかのように働く細胞なのですが、他人の行動をまねる、他人の気持ちを察するということではないかといわれていまして、これを共感細胞といいます。

赤ちゃんが生まれたので、家中で保育器の中にいる赤ちゃんを見に病院に行きました。近くの子がギャーッと泣いたら、ほかの子も目を覚まして、みんな泣きました。ところが、周りが全部泣いているのに影響を受けていない、全く泣かない赤ちゃんがいることがあります。

一つ分かったことがあります。騒がしいから泣いているのではなく、泣いている赤ちゃんの気持ちを察して泣くということが分かってきました。共感細胞です。小さい子は、一人が泣いていると、ほかの子ももらい泣きします。同じような気持ちで泣くタイプの子というのは、感情が正常なのです。０歳～３歳の子どもさんの指導を毎日している人は、この辺がお分かりいただけると思います。笑っている人を見ると、こっちまで笑う。泣いている人を見ると、こっちまで泣ける。これがいいのです。

自閉症で欠けているのは、共感細胞です。いとおしい人が手を広げてわっと来たときに同じ気持ちになって抱き合うということが、自閉症には起きにくいです。自閉症の方が結婚するときに、「いとおしいという気持ちは、多分死ぬまで分からないと思います」とおっしゃっていました。

私は、何人かのアスペルガーの人に、なぜ結婚したのかと聞きました。最初に聞いたのは、ドナ・ウィリアムズという世界で一番有名な自閉症の方です。彼女はたくさんの本を書いています。日本に２～３回呼びましたが、大阪で講演していただいたときに、彼女が蛍光灯が駄目だというので、蛍光灯のない会場を見つけるのが大変でした。食べるものにも問題があって、イギリス人なのですが、小麦粉が駄目、卵が駄目、お砂糖が駄目、塩が駄目なのです。これだけ駄目ですけれども、何か食べるものを作ってくださいと関西中のホテルにお願いしたら、１か所だけ、うちで引き受けましょうと言ってくれたのが京都ホテルでした。しかも、この方の場合、普通の自閉症よりも難しいです。ほかの子は、そこまでいきません。そんな大変な子はほかにはいないです。

ドナ・ウィリアムズさんが来るときには、いつも男の人が別々の部屋を取って来ておられます。あいさつもしませんが、いつも座っておられるので秘書か何かかなと思っていました。とうとう３回目の来日の前に「結婚しました」と

いう連絡が入って、それがあの人だったのですが、「ドナさん、どっちがプロポーズしたのですか」「私に決まっているじゃないですか」「どうやったのですか、教えてくださいよ」。

彼女が言うには、ある日突然、いつもこの人が一緒にいるということに気付いたのだそうです。私たちはいつも気付いていましたけれども。そして、「なぜ私のそばにいるの」と聞くと、聞かれている方もかわいそうなのですが、黙っているので、「もしかしたら、私と結婚したいの」「はい」「じゃあ、しましょうか」となったそうです。ですから、愛情とか、いとおしいというのはどういうことか、全然分かりませんとおっしゃっていました。

同じように、ニキリンコさんもそうです。私の研究室にずっと通っていた方ですが、あの方もちょっとそこが弱いです。結婚されているのですが、「あなた、私と結婚するの」と聞いたら、向こうが「はい」と言ったそうです。聞いた方が早いですよね。なぜいるか分からないのにじっと黙っていたら、いつまでたってもそのままの状態です。相手の気持ちを読むとか、感情を読み取るとか、この人は私のことをどう思っているのだろうとか、考える必要がないです。どうせ考えても分からないのですから。それなら、聞いた方が早いわけです。「私と結婚するのですか」「はい」「じゃあ、しましょうか」。そこで「ああ、そうですか」で終わってしまうのかと思ったら、「しましょうか」となるのです。そうではないのです。いつもそばにいるから便利だということもあるのかなと思いますが、なぜなのか、ここから先は私も読めません。

感情とか情緒というのが、ものすごく難しいです。ただ、誤解がないようにお願いしたいのは、自閉の子どもは人の気持ちが分かりませんとか、すごくKYで場面理解ができませんということをよく言いますが、翌日に分かったり、１年後に分かったりすることがあるのです。幼稚園でも、「昨日はごめんね」と言う子がいるのです。こういうときは「ごめんね」と言わなくてはいけないから言っているということもあるので要注意なのですが、一応言ってくれるのです。５年ぐらいたってから言う子もいます。「あのときはごめんね」といっても、相手はあのときが全然分かっていませんから、「それ、何のとき」などと言うと余計に混乱するのですが、そういう種類のことが起こってしまいます。

今のところが非常に大切な情緒の部分のお話です。

６．自閉症について

6-1．A君のケース

残った時間で自閉症の子どもさんの話をします。自閉症の子どもさんにとっては、幼児期の皆さん方の対応がうまくいくということが、後々の人生にものすごく大きな意味を持ちます。最初に失敗したら心の傷に残りやすく、逆に、幼児期がすごく楽しかった、いい先生に巡り会えたというのは、この子たちにとってものすごいエネルギーになりますし、大切なところです。今までもその流れで話をしているのですが、これからもう少しそこを詳しく言いますので、ぜひ聞いてほしいと思います。

３歳半の自閉症の子のお話です。今なら高機能自閉症という診断名がつくのかもしれませんが、30年前は高機能とかアスペルガーという言葉はなく、重い自閉症と軽い自閉症だけでした。場所は大阪教育大学平野分校です。今、大阪教育大学は柏原市に移りましたが、当時は天王寺と池田と平野の三つに分かれていて、私は平野に28年間いました。その大阪教育大学平野分校に８か月通っていた自閉症の子です。

重い自閉症です。言葉がなく、こちらがしゃべると同じ言葉を繰り返します。今は、動物になぞらえて言うのは差別的な言い方だということで、「オウム返し」とは言わずにエコラリアとか反響言語という言葉を使うのですが、そういう種類のこともあった子です。目も合いません。

ただ、多動な要素もすごく強いです。独り言のようにいろいろしゃべっているのですが、相手に向かってのコミュニケーションとしては言葉が使えません。いろいろしゃべっている割には、全然通じないのです。しかも、無理やり抱き上げるとかみついてきます。女子学生が鼻をかまれて、３週間歯形が消えませんでした。私は観念して山口県まで親に謝りにいかなければいけないかと思ったぐらいです。これから結婚しますという女子学生の鼻に歯形を付けるという、どう考えても大変なことをしてくれたのがこの子です。かわいいので、「○○ちゃん」と抱いたのですが、それが本人の意思に反していたために、がぶっとやられたのです。

では、30年近く前の状態を見てもらいます。

○ビデオ上映

先生が、こうしてくれ、ああしてくれとやっても、全く乗りません。指示的に何かさせようと思っても全部駄目で、30分ぐらい追いかけ回しているような形です。それが初回で、８か月、毎週１回、大阪教育大学に通ってこられました。

実は、ビデオを撮ったのは、この子のお母さんです。ファインダーを通して自分の子どもを見ると、距離が少し遠くなって客観的に見られるのです。ですから、子どもを客観的に見ることができないお母さんには、ビデオを撮ってもらいます。そうすると、子どもの見方が少し変わるのです。それをしていたときのことです。

８か月、大阪教育大学で指導しました。お父さんの転勤で、ある日突然「今日で終了です」ということになったのでこちらも心残りでしたが、風の便りで、このA君が、小学校は知的障がいの学級に入ったということが分かりました。通じませんから、知的障がい学級の中に入っていたのだと思いますが、そういう情緒的な問題を持っている子の学級とか知的障がい学級というのは当時からありました。

今から数年前に堺市で公開講座をしたとき、一人のお母さんが私のそばに来て、「竹田先生、覚えていらっしゃらないと思いますが、25年前にうちの息子が先生の研究室でお世話になった○○といいます」と名字をおっしゃったのです。「A君のお母さんですか」と言ったら、お母さんはびっくりしておられました。「25年経つのに、名字を言っただけで自分の子どもの名前をさっと言った、すごい」と。でも、私はいつもこのビデオを見ているのです。

当然、私の質問は「A君はどうしていますか」です。25年経って、今29歳です。あの状態で大きくなったとしても、一般的には、福祉の世界で単純作業をしているか、税金を使う側で何かいろいろやっているに違いないなと思うわけですが、結論だけ言うと、A君は大阪工業大学を卒業しました。専門は物理学です。

読み書きは駄目ですが、数字には非常に強く、今はシステムエンジニアをしているそうです。どんな仕事かというと、病院のカルテづくりとか、どこの科からでも閲覧して、患者さんのデータをまとめて流して、こうしたらいい、ああしたらいいと言うためのプログラムを作っているのです。

その彼からメールが来ました。「大阪教育大学は覚えているけれど、竹田先生は知らん」と書いてありました。「あれだけ世話したのに、知らんとは何やねん」と怒りましたが、３歳、４歳の記憶が全然ないのです。ただ、後で聞いたら、「女の先生が一人おった」「あんた、かみついたやん」。それだけは何と

なく記憶にあるらしいです。

「A君、竹田先生は火曜日に高槻市の大阪医科大学にいます。その日なら時間が取れます。どうですか」。すぐ返事が来ました。「火曜日は仕事です」「どこか１回でも火曜日が空くときがあったら教えてください」「火曜日は駄目です」とすぐに返事が来ました。調べてみると、どこにも所属していなくてフリーなのです。自閉が強いから所属できないのですね。ところが、仕事の中身がちゃんとしているということが分かっているので、「Aさん、すみません、１か月間うちを手伝ってください」というように助っ人としてあらゆるところから声が掛かるのです。ですから、一匹狼なのですが、１年中、何か仕事が入っているような人なのです。けれども、日曜日はお休みです。

たまたま私の方が、３か月先の日曜日にキャンセルが入って休みができたので、「A君、○月○日の日曜日、空きました。君がいるところと先生のいるところの間がちょうど名古屋ぐらいだから、そこで待ち合わせしませんか」。その日のうちに返事が来ました。「日曜日は休みです」。それが分かっているから聞いているのです。「何や、自閉症は全然治ってへんやないか」。すぐにお母さんからフォローのメールが来ました。「このままではいつまでたっても会えませんね」。「あんたのDVDをまだ使ってるねんで。今度、焼いておいてあげるからな」。その話をしてから３～４年たっているのですが、結局、会えなかったので送りました。

高機能自閉です。なぜアスペルガーではないのか。幼児期、言葉の発達に問題があり、ほとんどしゃべれない。けれども、能力的なものは高く、しかもこだわりも強い。人の気持ちが分かりづらい。すごく自閉の状態がきつかったのです。今で言う高機能自閉です。高機能自閉やアスペルガーの診断名が付く子というのは、小学校、中学校、高校、大学と行くのですが、めちゃくちゃ変わっています。友達はいないし、世の中とは随分ずれていて、すごく狭い感じだけれどもその中で生きていくのです。中には、この子のように仕事をして、税金を使う側ではなく、払う側になっている子もいます。もしかしたら、この子は将来結婚するかもしれません。そんなことは小さいときには絶対に考えられませんでした。この子が大学を出るということすら考えられませんでした。幼稚園、保育所時代から始まって、小学校時代、「大変やで、あの子」と言っていた子が、10年、20年経ったときにこんな感じになっていることがよくあるのです。

しかし、出だしが肝心なのです。出だしにめちゃくちゃな指導をしていたら、

大体フリーターで終わっています。それよりも、一番の問題は引きこもりです。幼稚園からいつもしかられていて、いつも怒鳴られていますから成功体験がなく、能力を持っていても、結果的に引きこもりになるのです。そうすると、ますます鬱状態が強くなります。出だしは保育所、幼稚園なのです。そのころにどういう形でセルフ・エスティーム（自尊感情）を高めるような支援ができていたか。そういうことを考えたら、皆さん方の役割は大きいし、責任も重いのです。

6-2. 幼児期の特徴

幼児期の特徴として、視線が合いにくい。分離不安が欠如している。言葉の遅れはある場合とない場合の両方あります。ところが、集団の問題だから親は気付きにくいのです。１対１では問題が起きにくいので、親は「うちの子は問題ありません」と言います。家では問題ないのでしょうが、保育所では大変です。指示に従えず、自分の興味のあることに没頭する。中には、ポケモンの世界でずっと生きている子もいます。

昨日、相談がありました。ある小学１年生の子が、自分の世界に入ってぶつぶつ言っていたら、先生が「やかましい。今、あなたがしていることは、周りの子に迷惑をかけています。黙りなさい」と言ったのです。そうしたら、パニックです。本人は調子よく、楽しく、自分の世界で誰かと話をしていたのです。その誰かがそこにいないから、周りから見たらおかしいのですが、この子は調子よくやっていました。そのときに、ものすごい調子でしかられたことからおかしくなってくるのです。「あなたは、周りのお友達に迷惑をかけているから、みんなに謝りなさい」といって30人の前に出されて、みんなに「ごめんなさい」と言わされました。

この子には自閉症があって、自閉症の特性の一つとして、自分の世界に入ってお話をしているということへの理解がその担任には全くなかったのです。そう考えると、この子がこれからどんなに苦しい生活に入っていくかというのは目に見えています。ちょっとした関わり方なのです。

6-3. 才能のある子どもの特性

優れた才能を持っている子もいます。しかし、おたく族です。虫博士、恐竜博士、中にはJRの時刻表博士もいます。B君は変わった子で、「竹田先生、先生のお誕生日は何年何月何日ですか」と聞くので、誕生日を言うと、「はい、

金曜日です」「何が」「先生が生まれた日の曜日です」。コンピュータを使って調べたら金曜日でした。うちの大学院の学生20人に生年月日を言わせたら、「はい、あなたは水曜日です」「月曜日です」「あなたも水曜日」とやっているのです。本当かと思って調べたら、全員当たっていました。ぱっと浮かぶのだそうです。僕は千八百何十年からは大丈夫ですと言っていました。そういうカレンダー人間がいるのです。

周りからしてみたら、何の役にも立ちません。ですから、一つ間違ったら、見世物で終わるのです。これが怖いのです。この人の能力なのですが、その能力を生かして仕事にするのはちょっと無理です。

長期にわたる注意力、執拗な質問。同じことを何回も何回も聞いたりします。

6-4. アイコンタクトを取らないASDの子どもたち

絵の真ん中にいるのがチャーリー君ですが、最初、チャーリー君はまだいません。四つのお菓子だけがあります。「A君、この四つのお菓子の中から大好きなのを一つ選んでください」と言うと、キットカットを選びました。次にチャーリー君が登場しました。「A君、チャーリー君はどのお菓子が欲しいと思う」と聞いたら、A君は即座にキットカットと言いました。「それはなぜ」「僕の好きなものは、チャーリー君も好きに違いない」と言いました。これは自閉症の子の特徴的な答えです。

アメリカでバーロン・コーエンという人が1994年ぐらいにある研究しました。３歳～４歳、年少さんから年中ぐらいの子どもさん20人に、「チャーリー君は、

この四つのお菓子の中からどのお菓子が欲しいと思うかな」と聞いたら、ほとんどの子が右下を選びました。「それはなぜ」「だって、チャーリー君、欲しそうに見てるもん」。アイコンタクトが３歳で分かるのです。自閉症の子はこれが読めません。

目が分からないのです。自閉症でない３歳～４歳の子は、「今日は先生に近づかん方がいいな」とか、いらいらしているのも全部読みますから、上手に立ち向かいます。親との関係、先生との関係もそうです。ところが、自閉症の子はそれがないから、いらいらしている人にわざと行って余計にしかられたりしています。

6-5. 心の理論の欠如

自閉症の子どもたちは、他人の視点に立てない、人の気持ちが分からない、言葉を字義どおりに解釈する、しつこく相手の嫌がることをするという特徴があります。例えば、お母さんが台所で作業をしていて、「お風呂を忘れてたわ。A君、ちょっとお風呂見てきて」。ここまで言ったら分かりますよね。お母さんが言ったのは「お風呂を見てきて」です。言葉どおり考えて、お風呂を見にいって帰ってきたのです。「どうやった」「どうやった言われても、見てきた」。お母さんは、お風呂の水がいっぱいかとか、お風呂が沸いたかとか、ある意図を持って「ちょっとお風呂を見てきて」と言っているのです。皆さんも、全部は言いませんね。あることを言いながら別のことを意味するというのは、何回も言っているうちにみんな分かるのです。それが自閉症の子は駄目なのです。言葉をすべて字義どおりに解釈します。

これが幼稚園ぐらいから起こってくるので、この子に話をするときは全部言ってあげないといけないなということが分かります。ほかの子は一部でも分かるのに、この子はそうではない。ですから、子どもによってやり方を変えないといけない部分があります。こういうことを心の理論課題に弱いといいます。他人の視点に立てない、人の気持ちが分かりづらいということです。

6-6. 言語面の特徴

それから、冗談が通じない、皮肉が分からない、人の意図を取り間違う。こういう種類のことが、小学校、中学校、高校生になっても起こってくるのですが、そのときに、相手の気持ちが分からないためにとんでもないことを平気で

言ってしまうことがあります。

大阪の、ある高校１年生です。中学生まで不登校だった子どもたちを積極的に受け入れている高等学校です。20人のクラスの担任になった先生が、これから１年間の過ごし方についてお話しになりました。そのときに、一人の子どもが「はい」と手を挙げました。後で先生は当てるのではなかったと反省していましたが、当ててしまいました。

その子は、「先生、目尻にしわがありますね」と言いました。後ろに親がいます。20人の生徒もいます。全部新しい子たちで、お友達はまだいません。その入学式後の最初のオリエンテーションのときに、これから１年間お世話になる担任の先生に向かって、絶対に先生が嫌がるであろうことを平気で言ったのです。そんなことを言われたらどうしますか。嫌だなと思うだけでは済まないでしょう。

その先生から私にメールが来ました。「確かに私はもう年です。目尻のしわは、そうすぐ消えるものではありません。だけど、毎日は言われたくないです」。先生は、相手が発達障がいということは分かっているのです。けれども、４回連続で言われたら切れて、「先生の嫌がることは言わないでください」と言ってしまったのです。先生は、後で「しまった」と思いました。１年がかりでやらなくてはいけないことを、入学したその週に言ってしまったわけです。そうしたら、その子は反論したのです。「あるものをあると言って、どこがいけないのですか」、もっときついではないですか。

この子はアスペルガーです。こういうことを高校１年生になった子がやったのですが、出だしは幼稚園から始まっているのです。保育所の時代からそういう傾向はあるのです。ただ、そのころというのは、発達障がいでなくてもまだKYですから、中には思ったことを平気で言う子がいます。ですから、それほど目立ちません。ところが、このままで小学校に上がってくると、やはりおかしいとなるわけです。どこかで言っていいことと言ってはいけないことに気付かないといけないのです。ですから、年少・年中ぐらいのことがそのまま続いて年長になっても出てくるのは、要注意なのです。

私の教え子なのですが、大阪市の指導主事をされていた先生には４歳の男の子と８か月の女の子がいます。お母さんと子ども２人が一緒にお風呂に入りました。お母さんが頭を洗っているとき、子どもは２人とも湯船にちょこんと立っています。お母さんは、８か月の妹が心配なので、４歳の子に言いました。「妹

をちゃんと見とくんやで。今からお母さん、頭を洗うからな」「うん」といい返事をしました。お母さんが頭を洗い終わって見てみたら、お兄ちゃんはいるけれども、８か月の妹が見えません。はっと見たら湯船の底でブクブクやっているのです。お兄ちゃんはしかられますよね。「見とけと言うたやんか」「僕、じっと見てるやんか」。これは、４歳児としては正常範囲なのです。

けれども、年長から１年生にかけて、まだそれをやっているときは危ないです。状況判断ができていません。「見とけ」と言われても、妹がブクブクしているのにじっと見ているというのはちょっと危ないです。ですから、３歳～４歳、年少～年中まではあり得ることだと思ってください。でも、年長さん以降は危ないです。ましてや先生のレベルでそれをやる方が時々いるのですが、これはめちゃくちゃ危ないです。

ある日、私が朝早く研究室に行くと、台所のようになっているところに、お茶わんや、お皿、コップなど、積んでありました。前の日に学生がコンパをやって、洗わないまま家に帰ったのが、私が朝一番に来たためにばれてしまったわけです。一番最初に来た４回生の男の子に、「A君、ちょっと茶わんを洗っといて」と言うと、「はい」と言っていたのですが、「洗い終わりました」というので見にいくと茶わんしか洗っていないのです。

皆さん方も、緊張しているときに、周りが吹き出すようなことを平気で言ってしまうことがあるかと思います。お母さんと話をしていて、「おたくは何歳ですか」「３歳です」、「おたくは」「５歳です」、「おたくは」「33歳です」。年の話をしていて、「おたくは」と聞かれたら、自分の年を言ってしまったのです。ということは、状況判断ができていないのです。ぱっと聞かれたので、今、何を言わなくてはいけないかが分からなくなってぽっと言ってしまうというのはありますね。このレベルは誰でも起こるのです。でも、毎回起こってはいけないのです。要するに、文脈の中でというものです。

NHKが昔、「みてハッスル、きいてハッスル」という発達障がいの教材番組を作りました。私も一緒に作ったのですが、私が講演会で使っている事例は全部ここでアニメになっています。その一つをお見せします。

○ビデオ上映

今、これの続きで「スマイル！」という番組を作りました。曜日は分かりま

せんが、発達障がいを扱っており、幼児期から使えるさまざまな出来事を紹介しています。

6-7. 人の表情が読めない

表情が読みにくい子どもたちが発達障がいの中にいます。名前と顔が一致しない子、例えばどこかで担任の先生とすれ違ってもあいさつをしない子もいます。幼稚園ではないので分からない、服装が違うということもあるのでしょうが、保育所、幼稚園で先生が制服を着ておられる場合、制服を着ていないと、もう顔が全然分からないのです。

表情が読めないという中でいうと、にっこり笑ったらあなたのことを好きなんだよと教えてしまうと、大人になったときにストーカーになりやすいです。「あの人、笑った。僕のことが好きなんや」となると、ずっと追いかけ回します。発達障がいがストーカーになりやすいというのはそういうところなのです。

表情からの情報を読めないので、だまされることがあります。言葉を字義どおりに解釈するということは、言い換えれば裏の意味が分からないのです。私たちは必ず表と裏の意味が両方分かって行動していますが、そこから来る問題があります。

相手の目を見て心が分かるという話なのですが、８枚の絵があります。これは欲望を抱いているという目です。でも、ふざけていると思う人もいるだろうし、慌てていると思う人もいるだろうし、確信していると思う人もいるかもしれません。どれか一つ、私はこれだと思うというものがあると思います。

アスペルガー障がいは、まずこの意味が分からないのです。ふざけているというのはどんな目になるのか、欲望を抱いているというのはどういう目になるか、このこと自体が言語として通用しないのです。それぐらい目からその人を読むということは、不可能に近いぐらい難しいのです。

さらに、もう一つ難しいことがあります。特に、保育所、幼稚園のレベルで起こることなのでお話ししておきますと、１年生のA君がB君との間にいろいろ問題を起こします。B君の上靴をA君が隠しました。先生が来て、「A君、あんた、B君の上靴を隠したやろ。みんな見てたんやで。知ってるねんで。ちゃんと謝りなさい。泣いているよ」。先生は、最初は優しく言っていました。でも、A君は、やったことは認めたけれども、「何が悪いねん」と思っていますから頑として謝りません。そのとき、私も後ろにいたのですが、とうとう先生は、

私の存在も忘れてしまって、「A君、先生はA君のことを思って言っています。ちゃんと謝りなさい」と怒鳴る調子で怒りました。45分たってベルがなりました。先生はあきらめて向こうに行きました。A君は最後まで謝りませんでした。

すごく怒られてかわいそうだったので、私はそばに行って「A君、今日はえらいしかられたな」と言ったら、A君はこっちを見て、「あのな、今日、先生、声が大きかってん」と言いました。しかられたということが分かっていなかったのです。「なんや、声が大きいな」という程度です。お母さんが毎日のごとく声を大にして子どもをしかっていても、ほとんど通じていないというのはそういうことがあるのです。

皆さんと子どもの関係の中でも、それが起こっていると思います。ほかの子どもに通じるコミュニケーションのやり方が発達障がいの子には全く通じていなくて、逆に思われているケースもありますから、ここは要注意だと思います。聞く力も弱いです。

だからといって、アスペルガーの人には感情がないわけではないのです。普通に感情を持っているのですが、それをどう表したらいいかという表し方が分からないのです。

6-8. その他の特徴と対応

それから、こだわりの強さがあります。食事、テレビ、移動手段など、さまざまなことに決まり事があって、子どもなりのルールを持っています。そのルールをほかの子にも強要するので周りが嫌がります。例えば、ボールを蹴るというサッカーの遊びをしていても、「僕のルール」を守らないとすごく怒るから、誰もその子のそばに寄らなくなります。家族は全部このこだわりに従わされるので大変です。

ストレスや嫌な感覚刺激にさらされると錯乱状態、パニックを起こします。こういうパニックは普通のパニックとは違うのですが、同じように思われてしまうことがあります。

それから、さまざまなことについていろいろなことを知っています。恐竜のことについては何でも知っているので、みんなから尊敬されたりします。

人が話をしていると、割り込みます。なぜ割り込んではいけないかということが分からないので、そこでしかるとまた難しいのです。割り込みに関しては面白い話があります。これは高校生なのですが、広い廊下の真ん中辺りに生徒

がいっぱい立っていて、先生とその生徒の間で話をしているときに、A君がその前を行ったり来たりするのです。先生が「ちょっと待って。後ろを通りなさい」「何でですか」「今、先生はこの子と話をしています。そういうことはしてはいけません」と言ったら、「何でしたらいけないんですか。こっちの方が近いです」と言うのです。ですから、人が話しているときに前を横切るということはいけないというのが分からないのです。

そのときの先生の説明に私自身感心したのですが、「私が誰かと真剣に話をしているときには、実はその人との間が赤い糸で結ばれているんです。あなたが通るたびに、その糸を切っているんです。一度切れてしまった糸を結び直すのはすごく大変なんです」と言ったら、その子は「ああ、そうなんですか」と言って、それからは割り込まないようになったそうです。これは、京都市立堀川高校という一番の進学校での話です。この子はその後、京都大学へ行っています。頭の良さなど関係ないのです。

もう一つ、発達障がいの場合に気を付けないといけないのは、カミングアウトの問題です。どうしてかというと、高校生ぐらいでインターネットを使っているような子どもに、「今日、あんたの診断名が出てたんや。あんたはアスペルガー症候群といいます」と言うと、子どもはインターネットで調べます。そこには、チェックポイントとして「人がしゃべっているときに割り込みます」と書いてあるわけです。自分が割り込みをしなければ、普通は「違うやん」と思うのですが、アスペルガーの子は、「そうか、僕は明日から割り込まないといけないんだ。アスペルガーだから」と思うのです。

ですから、２種類あるのです。診断名を付けると、その名前を調べてチェックポイントどおりの演技をしてしまって、気が付いたらアスペルガーを演じている子が出てくるのです。もう一つ、「何や、おれはあほやと思っていたけど、ちゃんと名前がついてるねん」と思ってほっとして明るくなる子もいます。ですから、どちらのタイプかが分からないうちに簡単に診断名を言っては駄目なのです。その子の傾向から読み取っていかなければいけません。いろいろなタイプがあるだけに難しいです。幼児期は絶対に言いません。小学生も言いません。中学、高校ぐらいから言うかどうか決めます。

それから、変化や移行に弱いところがあります。「このいす、僕のいす」といったら、絶対にほかの人は座れません。「隣はB君しか座れない」と決めていて、ほかの子が座ったら、蹴飛ばして、「ここはB君の席です」とやってしまいます。

この間、ある幼稚園であったのですが、Aさんというアスペルガーの女の子は、Bさんという女の子が大好きなのです。でも、Bさんは、Cさん、Dさん、Eさんとたくさんお友達がいるのでジェラシーを感じるのです。それで、AさんがBさんに「あなたは私の友達であって、Cさん、Dさん、Eさんとは友達ではありません。あなたは私と話をしなければいけません」と言ってしまったので、Bさんがこの子から離れていったのです。これが不登園のきっかけになったのですが、そんな経験はありませんか。この辺がものすごく厳しいところで、自分の決めたルールを押し付けるといったことがすごくあります。

発達障がいの場合、幼稚園や保育所でまずしなければいけないことは何かというと、この子はちょっと発達に偏りがあると思ったときには、まず見通しをつけるということです。具体的に言いますと、今からトイレに行きます。トイレを出たら手を洗います。その後、ハンカチで手を拭きます。その後、朝の会で部屋に入って、みんなで輪になって、名前を呼ばれたら返事をします。これらのことを全部絵に描いて、順番に並べておいて、これからすることが常に分かるようにしておくと、不安な状態が起きにくくなります。

すべてにそれを作る必要はありません。ある一定時間の中で見通しをつけるトレーニングをしていくために絵を使います。年長さんぐらいになると、文字にして出すこともあります。特に自閉系の見通しがない子どもの場合は、そこへ帰ってくれば「次はこれをするんだな」「これは終わったな」ということが確認できるので、うろうろちょろちょろがなくなりますし、先生に聞かなくても安心できます。こういうものを部屋に用意しておくと、その子だけでなく、その子の周辺にいるちょっとぼーっとしているタイプの子にも役に立ちます。これが見通しの問題です。

それから、後付けのルールは絶対に駄目なので初めにルールを決めます。そして、ルールが守られたときにしっかり褒めるのですが、ここでポイントを一つ言います。

Aさんはトランポリンが大好きでした。家に帰ってトランポリンを探すと、ありました。ソファーです。ソファーの上でドーンドーンとやると、下の階のおばちゃんが天井を傘でつついてきます。お母さんはすごく怒っています。「また下のおばちゃんが怒ってるで。今度、またゴミの日ににらまれるわ」。お母さんが「やめなさい。どんどんするのは」といって娘を普段より強い調子でしかると子どもはやめます。ところが、お母さんが台所へ行くと、またリビング

でドーンドーンと音が聞こえてきました。「何回言うたら分かるねん」としかろうと思ったら、子どもと目が合います。そのとき、子どもはお母さんに「ねえ、お母さん、これ下にいてないよ」と言ってやっているのです。お母さんから、「先生、うちの子、親をおちょくるのです」といって電話がありました。

これは年中さんぐらいの子でした。この子は、生まれてまだ4年しか経っていません。多く見ても5年ぐらいです。いつもしかられています。この子は、何をしたら褒められるのか、どうしたらいいのかがまだ分からなくて、気が付いたら、小さいときからしかられてばかりです。お母さんがしなくてはいけないのは、偶然でもいいからソファーにちゃんと座ってテレビを見たときに、「ちゃんと座ってテレビが見られるやんか。お母さん、うれしいわ」と褒めてあげることです。ところが、「そんな当たり前のこと、褒められますかいな」と言われました。

その当たり前のことを褒めておかないと、何をしかられているかの意味が分からなくなるのです。偶然でもいいから、当たり前のことをできたときにちゃんと褒めてください。そこで初めてメリハリがつきます。どういうことをしたら褒められて、どういうことをしたらしかられるのかということが分かるのはそういうことです。

ただ、これを幼稚園や保育所でやると、あの子だけ褒められて、私はいつもやってるのに褒められないということになるので、みんなの前では言わないで耳元でささやきます。耳元でそっと「ちゃんと座れたやんか。先生、うれしいわ」と言って気持ちを伝えます。そうやって、こうすれば先生は喜んでくれるということをインプットしていくのです。これが充電ステップです。いつもしかられている子ほど、何をしたらいいのかが分からなくなった子だということを、ぜひぜひ知っていただきたいと思います。

7．年長レベルで教えておいてほしいこと

年長さんぐらいになったときに一つ覚えておいてほしいのは、発達障がいの年長さんの社会性は、まだ3歳ぐらいで幼いということです。ものすごく認知能力が高くて、小学生みたいなことを言っている子もいますが、実際には、まだお母さんにべったりの子がたくさんいます。ですから、不安になると、お母さんの胸を触る、お母さんと一緒に寝るということもあります。しかし、お母

さんが、「抵抗はあるけれども、まだこの子は幼いから」といってそれを許してしまうと、１年生になったときに担任の先生の胸を触ります。担任の先生がびっくりして「やめなさい」と言うと、「けち、お母さんはさせてくれたで」と言います。そういう問題ではないということがなかなか分からなくなります。

１年生になったときは、他人の体のどの部分なら触れてもいいか、いけないかを教えるので、年長さんぐらいからその準備をしてほしいと思います。社会常識で触っていい場所と悪い場所を１年生では完全に教えてくださいとなっていますので、その流れを受けて、年長さんの最後ぐらいはこういうこともしっかり教えてください。タッチ、触るというのは、ソーシャルスキルの基本です。

そして、瞬間反応型が起こるのがちょうど年長さんぐらいからです。A君がトイレに行って手を洗った後、ポケットからハンカチを出して拭いたのですが、そのハンカチをポケットに入れたつもりで落としてしまいました。そして、そのまま部屋に戻りました。一部始終を見ていたB君はハンカチを拾ってあげて、「A君」と差し出して渡そうとしました。名前を呼ばれたA君が振り返ると、僕の特徴のある恐竜の絵の書いたハンカチを持っているB君がいます。「さっき、ポケットに入れたはずや」ということが分かる子は、一度ポケットを触ります。ポケットにハンカチがない、あの子が持っている、落としたんだということが年長さんだったら分かるので、「ありがとう」と言って受け取ります。

ところが、発達障がいのある子どもの多数は、ぱっと振り返って自分のハンカチを持っているB君を見たときに、「取りよった。泥棒、返さんかい」となって大けんかになります。全体の流れが分からないのでこういうことが起こります。瞬間、瞬間に反応するタイプの子どもさんはトラブルメーカーで、その子がいるところは必ず何か起こるということになりますので、そのときは必ずフィルムを巻き戻して寄り添って説明することから始まります。

これをしておかないと、フラッシュバックにつながります。１年後に、「あの子な、おれのハンカチを取りよってん」と思い出して、それこそ２階からポンと突き飛ばしたりすることもあります。ですから、不快体験はその日のうちに収めて、パニックを起こさないようにしていくことが必要です。これは、年少、年中だと難しいところがありますが、フラッシュバックというのは非常に大切なところなので年長さんぐらいにはやらなくてはいけません。どうしてそれはいじめではないのか、意地悪ではないのか、どうしてそれはあなたのハンカチを取ったのではないのかということを、ちゃんとその子に分かるように言

葉で説明していかなければいけないのです。

そういうことが学校に入ってから起こったときは、言葉だけではなく、書きながら説明していきます。そうすると入りやすいです。幼稚園はそういうわけにはいかないので、絵に描いても構いませんが、少なくとも本人に入るルートを考えて説明してあげてほしいと思います。

8．保護者も高機能の場合

保護者も自閉傾向の場合があるので、もしも皆さんのところに通っておられる子どもさんの親とうまくいかないことがあったときには、どんなことがあっても電話で子どもさんの様子を言わないでほしいと思います。必ず１対１で、親を目の前にして話してください。

もう一つ大切なのは、どんなことがあっても記録係を置くことです。お母さんとの話を記録係の先生が全部記録して、後で、「お母さん、さっきの話のポイントはこれだけれど、合っているかな」と確認を求めて、そこにお母さんにサインをしてもらってください。それをそのままコピーを取って本人に渡してください。そうすれば、後で言った言わないで絶対にもめません。

子どもさんのさまざまな難しい出来事を電話で説明してお母さんに分かってもらうということは、発達障がいの場合、絶対にしてはいけません。余計に問題をこじらせます。

9．おわりに

特別支援教育が始まりました。ウミガメを陸に揚げて、私たちの世界に適応しろといってもうまくいきません。ウミガメが自由に楽しくやれるのは海なのです。

同じように、発達障がいの子どもを指導するときに、こちらの世界で指導してもうまくいかないのです。この子は、どういう世界になったときに楽しく、伸び伸びと、しかも持っている力を発揮できるかというと、この子の世界です。それを忘れないようにしてほしいと思います。引きずり上げてこちらの世界で勝負しようとは絶対に思わないでください。これが特別支援教育の極意だと思います。